

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

松本中学・松本深志高校山岳部創部 100 年

ある高校の山岳部のことを書く。ある山岳部とは松本深志高校の山岳部である。7月8日にその前身の松本中学の名をも冠した「松中・深志山岳部創部 100 年記念祝賀会」が、松本市内の某ホテルにて開催された。私の母校でもあるが、私自身は山岳部の出身ではない。高校時代は隣の部室をもつバスケット部であった。しかし、最近某先輩の紹介で「会友」として仲間に加えてもらっている。

松本中学は、長野県最初の中学校として明治9年の創立で、すでに開校 140 年をこえているが、山岳部の発足は 1918 年（大正 7）、この年槍ヶ岳・白馬岳への登山が行われた（松本中学「校友」による）という。以来、100 星霜、途切れることなく歴史を刻んできた。「山岳部創部 100 年記念誌」の中で古幡開太郎氏は日本山岳会 100 年史から学校登山の歴史を引用し、旧制中学校の山岳部の発足状況を次のように書かれている。「神戸第一中学校（現神戸高等学校）では 1909 年（明治 42）「遠足部」が発足したが、「山岳会」が置かれたのは 1924 年（大正 13）、東京高等師範学校附属中学校（現筑波大学附属高等学校）に 1912 年（明治 45）、諏訪出身の博物学者矢澤米三郎教諭らが中心となり登山を目的とした「山岳会」が発足した。京都第一中学校（現洛北高等学校）では 1915 年（大正 4）、「京都一中山岳部」が創部された。この年部員であった今西錦司は富士登山に参加している。京都一中山岳部は博物地理担当の金井千仞教諭が生徒 13 名を連れ御嶽に登ったことが契機となって創立されたが、金井教諭は旧制松本中学校 18 回卒の大先輩である。そして、松本中学校に「山岳部」が発足したのが 1918 年、旧制中学校では 3 番目の創立ということなる。

僕が高校時代を送ったのは今から 40 年前のこと。祝賀会には、同期の部員も 4 人顔を揃えていたが、高校当時彼らが土曜日の授業を終えて、キスリングに大なべをくっつけて山に向かっていった姿は今でも目に浮かぶ。山岳部は夏になると小梨平に大きなベースキャンプ（通称ベーキャン）を設営し、夏休み中彼らは交代でテントキーパーをしていた。今だからこそ言える（いくら何でももう時効でしょう！）が、信大のベーキャンに張り合っ、テントの入り口にビールの空き瓶をうずたかく積み上げていたのも、古き時代の名残である。僕は高校時代の 3 年間、山好きの担任に連れられクラスでこのベーキャンをベースにした登山を行い、それが今の僕の文字通りベースになっているのだ。1 年の時は、島々谷から徳本峠を越えた。2 年の時は、涸沢へのベースとして使った。クラスのみんが帰った後も一日滞在し、山岳部の先輩に連れられて西穂に登った記憶がある。3 年の時も行った記憶があるのだが、はて、どこへ行ったのだったか？

そのベーキャンが歴史的使命を終えたのが、奇しくも愚息が 3 年生の時のこと。愚息は山岳部に所属していたが、そのころになるとテントそのものも縮小され、夏のテントキーパーもせすに一夏張りっぱなし、使う人もほとんどない状態だった。山岳部の生徒は、OBに連れられて設営と撤収だけを行うだけという状態であり、そのことを管理者である日本アルプス観光に文句を言われ、ついにその年をもってベースキャンプは終焉を迎えたのだった。あれからもう 15 年近くが経過した。

祝賀会で多くの先輩たちと酌み交わしながら、ひとしきり青春のひと時を思い出した。

栃木県での講習会

7月7日に栃木県教育委員会主催の登山講習会に講師として招かれた。率直なところ、あの雪崩事故以来、なぜ山岳部顧問をするのか自問し続けている先生もいるという。第1部は高校山岳部顧問とはどうあるべきかを、悩みながらも再建に向けて前に進みつつある先生方とともに考えてみた。さらに第2部では、山岳部員たちも交え、高校山岳部活動をどう行っていけばいいのかを語らせていただいた。

生徒の中には、雪崩事故で埋まった生徒もいたそうだ。彼は1年間の実質的活動自粛の中で何を思っていたのだろうか。いろいろな逡巡があったことだろうが、しかし、それらを乗り越えて再びまた山に向かう勇気をもってくれたことに大きな敬意を表したい。安全登山をするために、目的をもって山岳部活動をしよう、危険を察知できる安全教育こそが今求められているというのが、僕の話の全体を通すテーマだったが、先生も生徒も、その話を熱心に聞いてくださった。

講習会が終わった後、30分程度、先生たちと胸襟を開いてお話をすることができたことも自分としては大きな経験であった。先生たちの率直な思いを聞くことができた。

先ごろ栃木県の教育委員会から当日の講習会が終わった後の、先生方の感想をまとめたものをいただいた。そこにはこの講習会を通じて、安全登山や登山計画、自立した登山者といったキーワードを先生方が先生方なりに受けとめてくださったことが書かれていた。これからも折に触れては、「あの事故は」と語られるだろう。だが、だからこそ、これからも栃木県の先生方を応援していきたい。

編集子のひとりごと

夏山のシーズンがやってきた。大町岳陽高校では、来週全校登山が行われる。去年は悪天候で中止になったので、2年ぶりの開催になる。毎年一定の人事異動があるという宿命をもった県立高校にとって、1年の空白は、思ったより影響が大きい。この学校へきてはじめて登山をする先生が前年開催した年に比較して2倍いるということになる。今年は梅雨明けも早く、快適な夏山と思いきや、全国各地で続く猛暑。この状況は来週も続きそうである。熱中症が心配だ。前身の大町高校時代以来72回目を数える伝統行事、大きな意味のある行事ではあるが、この行事こそ安全がもっとも求められる。事故の無いよう、万全な備えで臨みたい。そして、これは、8月に三重県で行われるインターハイでも同様である。2年前の岡山での酷暑のインターハイでは、熱中症が多発した。そのときの経験を十分に活かし、絶対に事故がおきないようにしなければならない。

昨日(21日)、今日(22日)と東京のオリンピック記念青少年センターで、国立登山研修所の安全登山サテライト講座が開催された。講師は研修所の専門調査委員である、北村憲彦氏(プランニング)、飯田肇氏(山の自然とリスク)、村越真氏(ナビゲーションとリスクマネジメント)、大城和恵氏(登山医学)、そして不肖私(登山者育成)の5名。それぞれ専門的な見地から、多角的に安全登山について語った。この講座は栃木の事故を受けて、高校の先生方をも対象とした座学での講習会である。170名あまりの参加者の中には高校の関係者が40名程度。6月に行われた講師研修会もそうだが、これらを受講された方が、核になって、各県、地区で顧問を育てる推進役となってほしい。